

# industria

## 社員インタビュー

2024年8月

ソリューション  
(兼)テクノロジー  
部長 福田 寛人

industriaのDNAから  
生まれたFILSTAR秘話



### ■ 生意気だった私を社長が受け入れてくれて入社できた

—入社きっかけは、専門誌の研究者としてインダストリアと共同研究をされていたということですね。どんな研究をされていたのですか。

私はもともと化学を専攻していたんです。『化学と工業』という専門誌があって、その産学連携の共同研究で、インダストリアと「薬剤フリーによる排水処理」をテーマとする研究に取り組んでいました。それが縁となって、研究員の任期終了後に社長に直談判してインダストリアに入社させてもらったんです。

その研究自体は成果が出なかったんですが、入社後、その時のテーマの中から派生した技術を活用して作ったのが「イーセル (eCELL)」という製品です。

—「生意気だった私を社長が受け入れてくれて入社できた」とのことですが、当時の福田さんは、どう生意気だったんですか。

当時は自分の専門分野に自信を持っていましたからね。上下関係なく、意見もオブラートに包まずズバズバ言うタイプでした。「これはこうだから、こうなんです」って、結構、理屈っぽいやつだったんです(笑)。

—会社の雰囲気として、「インダストリアは役職など関係ない会社」だと書かれていますが、そのあたりは、福田さんご自身の性格や考え方とも合ったということなんですか。

どうなんですか。まあ、僕は良い意味で、そう認識しちゃっていますが(笑)。

実際、働いていても、上下関係はありませんし、上からの圧力のようなものも感じませんね。理論立ててちゃんと説明すれば、やりたいことをやらせてくれますし。

うちの会社では、「指示待ち人間」は評価されないんですよ。自ら動いてチャレンジする人間が好まれるんです。その意味では、私のような「生意気な人間」が受け入れられる会社なのかもしれません(笑)。

—福田さんは、幹部社員として、新入社員の入社面接にも立ち会われると思いますが、どういうところを重視して面接をされるんですか。

技術職で応募してきた人に対して、面接で僕が必ず聞く質問は、「営業をやってくださいと言ったら、やってくれますか」ということです。それに対して、「はい。できることがあれば何でもやります」という人を、僕は合格にしていました。

### ■ 夢中になった「イーセル (eCELL)」と「イズボックス (isBox)」

—入社後に「夢中になった仕事」として、さきほどの、イーセルの開発を挙げられていますが、その時の思い出や大変だったことなどは何かありますか。

製品の開発自体はうまくいったんですが、その後のタイムスケジュールの短さには驚きましたね。なんせ、製品が完成する前に展示会の日程が決まっていたり、完成したばかりで海外案件があるからPRしたりと、もう、大変でした。

あと、初期ロット数を決める時も、最初僕は、硬めの数字で数十台くらいかと考えていたんですが、社長から「売れるんだったら100台、作っちゃえ」という話をされて、びっくりしたことを憶えています。それまで研究員をしていて、企業で働いたのは初めてでしたので、そのスケジュール感の短さとダイナミックな決断力には驚かされました。

その後も、当時は営業のやり方も分からなかったもので、もうテクニクではなくガムシャラに売り歩きました。自ら電話営業もしました。おかげさまで、全て売り切れて良かったです(笑)。



水溶性クーラント腐敗防止装置  
eCELL

——「夢中になった仕事」の2つ目として、イズボックス（isBox）の改善を挙げられています、これはどういうところに夢中になられたのでしょうか。

この装置は、液体から固体を分離して綺麗な水を供給するだけでなく、分離したものを固めて排出するという装置なんです。分離・回収されたものは有価資源としてリサイクルできます。

そのため、結構複雑な仕組みで、開発・改善には苦労しました。部品点数も多く、1個1個の部品の精度や寸法誤差がかなり影響する装置なんです。いろいろなものが途中で動かなくなったり、耐久性が悪かったり、と大変でした。夜の喫茶店で電卓と手書きで部品図面を書いたりして、もう必死でしたね。その分、夢中になることができました。

#### ■役職など関係ない。いま自分にできることをやるのが最高に格好良い

——これまでのお仕事の中で「忘れられない言葉・出来事」として、会長と社長のエピソードを挙げられています。

会長とのエピソードとしては、僕がたまたま徹夜明けだった日に、早朝出勤された会長が誰もいない工場一人で掃除を始められたんです。まさか、会長が一人で掃除をしているなんて思いませんでしたから、僕が手伝おうとすると、「手伝わなくていい！。お前の仕事はまだ終わっていないだろう。お前は、お前がやらなければいけない仕事をやれ！」と怒鳴られたんです。職人気質の会長でしたからね。

また、社長との出来事としては、特注ユニットの製造を夜遅くまでやっていたところ、社長がふらっとやってきて、「俺もやった方が早く終わるだろう」とレンチを手に持って自ら作業を始められたんですね。

この2つの出来事から、この会社は、「役職など関係ない。いま自分にできることをやるのが最高に格好良いんだ」ということを教えてくれる会社なんだと思いましたね。当時はいまほど大きな会社ではありませんでしたが、いまでもそういう文化や雰囲気は継承されていると思います。

#### ■期限は決まっている。ならば、いま手元にある部品でどうにかしよう

——ご自身の信念として、「何事も本気で取り組みれば成功する。自分に甘えてしまうと成功しない」とありますが、何か具体的なエピソードはありますか。

さきほどお話ししたイーセルの展示会の時のことです。

まだ製品の一部が完成していないにも関わらず、展示会が来週に迫っていたんです。その時は、これから部品を手配するのは不可能だから、色々考えて、「やはり、現実的には難しい」というストーリーを考えました。でも、いま考えると、それは「甘え」にほかなりません。いまなら、「期限は決まっている。ならば、いま手元にある部品でどうにかしよう」と考えると思います。

100パーセントのクオリティを出すことは、現実的に考えて無理です。じゃあ、0パーセントでいいか、といえ、そうではない。「100パーセントにこだわり過ぎる」というのは、ある意味「甘え」なんですよ。

そうではなくて、「80パーセントでやってみよう。そして、その80パーセントを90パーセントにする努力をしよう」というのが「本気」ということなんだと思います。

もちろん、技術者としては、100パーセントが一番良いには決まっていますけどね。



#### ■「ものづくり」とは、努力が形となり、その努力が社会で活用されること

——「福田さんにとって、ものづくりとは？」という質問に対して、「努力が形となり、努力が社会で活用されること」と言われていますが、具体的なエピソードはありますか。

さきほどお話しした「イズボックス」をあるメーカーさんに採用してもらった時のことです。

そのメーカーさんでは、それまで、アルミのカスをゴミとして捨てていたんですが、うちのイズボックスを導入することで、それを固めて売りにすることができるようになったんです。ゴミが資源になったんですよ。

いままでの「ゴミを処理する装置」が「資源を生む装置」に変わったんです。嬉しかったですね。「社会で活用される」ということの手応えを感じました。

そのメーカーさんでは、その後、全ラインにイズボックスを入れてくれました。そのメーカーの現場の人も喜んでくれて、装置をいれた後に一緒に食事に行って馬鹿話をしたりして、そういう時は、ものづくりの嬉しさを感じますね。

#### ■インダストリアは「お米」。コア技術を活用しつつ、いろいろなことができる

——会社を「お米」に、たとえられています。「コア技術を活用しつつ、いろいろなことができる会社」だと。これは具体的にはどういうことでしょうか。

うちのコア技術は3つあるんです。

1つ目は「液体制御技術」。これはフィルスターのように流体を制御してろ過したりする技術です。2つ目が「超音波技術」。これは、超音波を用いて金属の微細加工を行う技術です。3つ目が「複合加工技術」です。通常会社だと、削るだけとか、磨くだけとか、溶接だけとかで終わることが多いのですが、うちがそれがトータルでできるんです。

そして、それらのコア技術のベースに、昔からの職人技術、機械では再現できないような職人技術が継承されているんです。それが、うちのコア技術です。

——なるほど。「そのコア技術を活用しているいろいろなことができる」という中の「いろいろ」とは、どういうことですか。

うちの場合、会社のシーズというより、お客様のニーズから作られる製品が多いんですね。ですから、お客様のニーズに基づく特注製品も多いのですが、その時、うちの製品にはない他社の製品を組み合わせて、オリジナルなものをお客様に提供するというのも、全然オッケーなんです。そういうことをNGとしている会社もあると思いますが、うちはそうではありません。

また、営業的にも、たとえば排水処理で困っているお客様がいたら、いろいろ調べて、配管のレイアウトを変更する提案もします。極論をすれば、うちの製品に関係しなくてもオッケーなんです。そういう、技術的にも営業的にも、お客様のニーズに対して柔軟に対応するところが「いろいろ」という意味ですかね。もちろん、「お米」という「コア技術」が核にして、ということですが。

#### ■インダストリアの魅力は、どんなチャレンジもウェルカムなところ

——他社と比べてインダストリアの良いところ、好きなところは「どんなチャレンジもウェルカム」ということですが、そういった社風というかDNAはどこから生まれてくるものなのでしょうか。

やはり、この会社の基礎を築いた会長や社長の態度や言動、生き方や考え方から派生しているもののように思います。

たとえば、うちの会社は、昔から、「できません」と言ったら誠なんです。「できません」ではなく、「これだったらできます」「こういうやり方でやってみようと思います」と言え、というのは、昔から、会長や社長から口うるさく言われています。

## ■「皆でやる、誰でもやる」という、インダストリアのDNA

——一方で、インダストリアのDNAとして「『皆でやる、誰でもやる』という精神」ということを挙げられています。

これは、要するに、「上下関係がない」「役職があまり関係ない」というところから生まれているのではないかと思います。もちろん、組織ですから役割分担はあるわけですが、たとえば、ある部署だけが猛烈に忙しかった時などは、誰からともなく自然と他の部署の人が手伝っていますね。お節介な人が多いのかもしれませんが（笑）。20～30人の小さな企業であれば、そういうのは当たり前でしょうが、うちの場合、いまは70～80人の会社になりました。でもまだ、創業当時のメンバーが残っていますから、新しいメンバーも彼らの背中を見て、自発的に皆でやる精神が自然と身に付いているのかもしれませんがね。この精神は、これからも伝えていきたいですね。

## ■本当に環境に良い製品は、何十年も使い続けることができる製品

——フィルスターの魅力・特徴として、「何十年も使い続けることができること」と書かれていますが、これはどういうことでしょうか。

「環境に良い」製品というのはよくありますが、僕は、本当に「環境に良い」とは、消耗品が出ないということよりも、「長く使い続けることができること」ということだと思っています。ほら、おじいちゃんやおばあちゃんが真っ黒になった自分のフライパンを何十年も使い続ける、というようなことです。1回使ったら、もう死ぬまで使い続けるとか。そういうのが、環境に一番良いのではないかと思います。その意味では、フィルスターって、そういう「ずっと使い続ける」ことのできる製品なんです。そこが、フィルスターの最大の魅力だと思いますね。

## ■たくさんの「成功」や「正解」を持っている企業の方が、より成長できる

——最後の質問ですが、福田さんご自身がインダストリアという会社に対して貢献できることとして、「若い世代に思いをつなげること」とありますが、それをやる上で、福田さんが、とくにマネージャーとして気をつけられていることはありますか。

そうですね、とにかく、偉そうにしないようにしています（笑）。インダストリアの文化・社風でありDNAである、「役職など関係なく、自分ができることをする」「どんなチャレンジでもウェルカム」「皆でやる、誰でもやる」という精神を守り、続けていくためには、それが大事だと思いますね。

——一方、インダストリアという会社のDNAは、福田さん個人の「自己成長に役立っている」とありますが、福田さんにとって「成長する」というのはどういうことでしょうか。

「成長」って、1年前の自分を振り返って、「これができるようになったな」「ここが変わったな」ということだと思うんです。その意味で、自分自身のこの1年間を振り返ってみると、マネージャーとして、直接的な指示をあまり出さなくなりました。最近は、若手の意見を尊重することを心がけています。マネージャーである僕が予めレールを引いてしまうと、それ以上の成果が出ないのではないかと思います。また、それだと、僕が考えている「成功」しか、成功でなくなってしまうのではないかとともに思います。それよりも、ある程度リスクはあっても、多くの若手メンバーの意見でやった方が、トータル的に見たらアウトプットのクオリティも高まります。たくさんの「成功」や「正解」を持っている企業の方が、より成長できると思うようになりました。

——そう思うようになったきっかけはあったんですか。

僕の固定概念で進めていた開発でうまく成果が出なかったことがあったのですが、若手の意見を取り入れたところうまくいった、ということが何回かあったんですね。そこで、自分自身、反省したんですよ（笑）。生意気だった昔を考えると、いまは、「やることをやる精神」を持ち「誰にでも謙虚な心を持ち、実践できる人間」が、僕にとっての“理想とする人物像”になっていますね。



今年の展示会から、自社ブース内でのセミナー講演にチャレンジしています。



新たな分野のお客様に向けたセミナーを開催することにもチャレンジしています。